

全校の皆さん、おはようございます。

新しい年を迎えることができました。一日が過ぎるということだけで考えると、十二月三十一日が一月一日になった、日付が変わっただけでもいえます。しかし、このような時間の節目に特別な意味を与えることで、私たちは、それまでの自分を反省し、古い自分を脱ぎ捨てて、新しい自分と成る「けじめ」をしているのでしょうか。

さて、私たちがいる「学校」は、「学ぶところ」という意味です。「学ぶ」とは、今まで知らなかったことを知ったり、新しいことが出来たりする喜びや楽しいことです。しかし、実際の学校生活では、その楽しいはずの学びが、楽しくないことや嫌いなことになったりすることもあります。

学校生活において私たちには日々「やらなければならぬこと」があります。例えば、受験に通用するために、ここまで何を覚えなければならぬ、就職のためには、こういうことを身につけておけば有利になるなど、私たちの学校生活にはこういった「ノルマ」というのがあります。そんな「ノルマ」を前に“無理だ”とかもつと自由にしたい“、という声も聞こえてきそうですが、義務教育ではない高校進学を選んだ責任もあるし、やることがないと怠ける生活を送ってしまうことも目に見えている私たちには必要なことかもしれません。

ところで皆さんは、授業中にこんな質問をしたことがありますか？

「先生、それはテストに出るのですか」

テストに出るから勉強する、出ないのならば関係ないから勉強しない。これは私たちの素直な思考でしょう。しかし、テストという「ノルマ」がないと勉強しないというのは、「学ぶところ」に身を置くものとしていかなるものでしょうか。

勉強に限ったことではありませんが、現代社会を生きる私たちは、役に立つとか、立たないとか、得をする、損をするというように、自分の都合のいいようにしか物事を捉えられなくなっているような気がします。

しかし、「どんな食べ物でも自分の好みだけではほんとうの味をかみしめることはできない」（『雑草の輝き』）ことのように、物事は自分の都合が良いようにやっても身につくことはないはずで。

室町時代に生きた蓮如上人という方は「わればかりと思ひ、独覺心（どつかくしん）なること、あさましきことなり」（『蓮如上人御一代記聞書』）と、「自分だけが何でもよくわかつていると思ひ込み、こんな理屈に合わない教えは納得できないと批判し、自分の都合のいいようにしか物事を考えられないのは悲しいことである」と言われました。

新年を迎え、新しい自分に成る節目に、今一度「学校」がどういう場所なのかを考えてみてはいかがでしょうか。

これで朝の法話を終わります。